子育て習俗の今昔

高知小津高等学校 坂本正夫

ご紹介をいただきました高知小津高校の坂本でございます。「子育て習俗の昔と今」というテーマで、お話をさせていただきたいと思います。

最近わたしたちの学校の職員室では - そして先生方の学校でも多分そうだろうと思いますが - 「近ごろの高校生の考え方や行動はわからなくなった」という話をよく耳にいたします。また教師の間でも「最近の若い教師のいうことは分らん」という声や、逆に若い教師のあいだから「年輩の先生のいうことにはついて行けない」というようなことも耳にするようになりまして、世代間の考え方や行動様式の違いがきわだってきております。いつの時代にも若者と年配者の考え方や行動様式は違っておりましたけれども、今日の日本社会では特にそれがひどくなっているように思われます。

ところで、いま申しましたような諸問題は突然に起こったものではなく、それなりの理由や原因、あるいは背景といったようなものがあって、今日みられるような状況が出てきたのだらうと思います。そこでわたしは先ほど申しましたような子供の状 i 見あるいは社会の状況が出てきたのは何故であろうか、ということ民俗学の立場から、わたしが見聞してまいりました高知県の資料と、今日まで日本民俗学が集積してきました資料をもとにしてお話してみたいと思います。

昭和 40 年(1965)年 5 月のことですが、わたしは香美郡香我美町中西川という集落を訪ねました。バスを降りますと、すぐ近くの家縁側におばあさんが座っておりました。もう 90 をいくつか過ぎたおばあさんで大倉ウマというお名前の方でしたが、このおばあさんから明治、大正期の民俗についていろいろなることを聞きました。何を尋ねてもまことに適確に答えてくれるので不思議に思い、その後また訪ねて同じことを質問してみましたけれども、まったく狂いはありませんでした。

そのおばあさんから子どものころのことをいろいろ聞いていたときに、そのおばあさんがいうのに「お前さんは妙なことを聞く人じゃあが、御用の子というものをしっちょるかね」といいますので、「いや、知りませんが、それはどういうものでございますか」と聞いてみましたら、

「わたしは巳の年(明治 2 年・1869)に竜河洞の近くの逆川(現香美郡土佐山田町)という所で生まれましてここへ嫁に入ってきた者ですが、実は親から聞いた話ですが昔は生活が苦しかったので、子どもが 2、3 人おったら後へできた子どもはオシ(殺し)よりましたと。丙午の年に生まれた女の子や親の厄年に生まれた子どもは、待ちかまえておってオシタ(殺した)と聞いております。産んだらすぐにオスもので、オギャアと一声泣いたらオシてはいけなかったそうです。そりゃあ、お前さん、昔の人でもわが腹を痛めた子どもを殺すのはゴウナ(悲しい)けんど、生活が苦しゅうて食うていけんでオシよりましたのよ。

それがご維新になって、巳の年(明治 2 年)に今後は絶対にオシてはいかんぞ、生まれた子どもを殺した者は厳罰にするぞ、という法律ができたんですねえ。それで、わたしが五つ六つの物心ついたときに『お前は御用の子じゃあき本当はオサレ(殺ろされ)ちよったがじゃあけんど、お情で育ててもろうちよるんじゃあきに親のいうことを聞いて、ええ子にならにゃあいかんぞ』というて、びっしり(いつも)怒られたもんよ」と話してくれました。

この話にわたしは大変なショックを受けまして、早速図書館へ行って調べてみましたら、江戸時代には全国的に間引きが行なわれていた、ということがわかりました。土佐でも藩政時代には生活の苦しさから間引きが盛んに行われ、たびたび禁止令が出されておりますけれども効果がありませんでした。明治2年の巳の年には藩知事が禁止令を出して違反者を厳重に処罰することにしたので、この年に無事に生まれた子どもを「御用の子」と呼んだという話が、県下のあちこちに残っております。しかし、その後も間引は止まず、明治6年と8年にも県が間引禁止令を出しております。明治10年代からはだんだんと間引はなくなったようですが、それでも土佐清水市や幡多郡大月町には明治39(1906)年の丙午の年に生まれた女の千を間引いたという話が伝えられております。

わたしはこのような間引が土佐でも行われていたということに大変なショックを受けましたので、その後の村々を歩くときにはいつも間引のことについてもお年寄りたちに聞いてみました。そうすると出てくるわ、出てくるわ、県下全域の村々でまことにリアルな間引の話の聞くことができました。

以前の社会では「家」永続ということが重大な問題でしたから、どうしても何人かの子どもは必要なのですが一定数以上の子どもが生まれますと、生きていくためにしかたなしに間引をやったわけです。こんど生まれてくる子どもは間引くか間引かないか、ということは前もって分っているのが普通でした。間引は出産直後に行うわけですが、それを誰が行うかというところコーシャバンバ、コトリオバア、ヒキアゲバアサン、ヘソバアサンなどと呼ばれる経験をつんだ巧者な老女が行うことが多うございました。コーシャバンバというのは今のことばでいいますと産婆、助産婦のことですが、この国から認められた産婆や助産婦が土佐の村々で活躍するようになったのは大正～昭和初期以降のことです。それ以前にはどこの村にも一人、二人のコーシャバンバがいて助産の手伝いをしておりましたが、これが間引を実行することが多かったようです。それから姑さんや家族の者が間引く、あるいは産婦自身が間引くこともあったらうと思えます。

それじゃあ次に、どうやって間引いていたのであろうか、という間引の具体的な方法ですが、それにはいろいろなものがありまして詳しく申しますと5つぐらいの方法がありましたが、土佐で一般的にみられたのは次のような方法でした。昔は農村であっても漁村であっても、どの家にも障子戸がありました。それで今度生まれる子どもは間引くということがあらかじめ分っているわけですから、生まれるとすぐにその障子紙をちょっと破って取り、それを茶碗に入れてある水で濡らし、生まれた子どもの口と鼻の所へぱっとはりつけます。そうしますと、すぐに窒息死するわけです。これが東の安芸郡から西部の幡多地方までみられた最も一般的な土佐の間引き方法でしたが、他にもいろいろな方法がありました。

間引いた子どもは夫婦の寝室の床下に埋めその上にするしになる石を置いていたという所が多かったのですが、これを幡多郡西土佐村権谷ではツボオトシと呼んでおりました。天保(1830～44)ごろの土佐狂句テニ八に床下という題で、ねやの栄花で築山が出来ちよる というのがありますが、この風習を詠んだものだといわれております。土佐郡大川村ではトリアゲバアサンが、「茶の木の肥にするか育てるか」と聞いてから処置し茶畑へ埋めたと伝えられております。中村市富山、宿毛市橋上にも「茶の木の肥にした」という間引の隠語があったといえますから、同じように処置していたのだらうと思われれます。

ところで、わたしは本日のテーマ「子育て習俗の今昔」の序論として間引の問題を取り

上げましたが、これは次のようなことと関係がございます。

間引は今のわたしたちの感情から申しますと、まことに残酷なものに思われます。自分の腹を痛めた子どもをどうして殺すのだろうか、日本人というのはなんと残酷な民族だろうと思われる方も多いと思います。ところがかつての日本は間引という行為にそれほど罪悪感を持っておりませんでした。まだ生まれた直後の者は単なる肉魂であって人間ではないのだ、神のものなのだ、この世では食っていけないから霊界(神の世界)へお返しするのだ、というように考えておりましたので今日のわたしたちが考えるような罪悪感を持っていませんでした。前代の日本人の考え方では、この世で幸福に育てられない子どもは間引いて霊界へお返しするけれども、ひとたびわたしたちの仲間に迎え入れた子どもはみんなが協力して育てていこう、という考え方があったのです。

ところで、嫁さんが妊娠しますと5ヶ月目には帯祝いをおこないます。帯祝いは戌(犬)の日におこなうのがよいとか、帯の中に干した熊の腸を入れると安産であるとか、そのほかいろいろなことを申しますが、その日には妊婦の実家のお父さん、お母さんを招いたり、向う三軒両隣の人を呼んだりして帯を締め、みんなでお腹の中の子どもがすくすくと丈夫に育ち達者で生まれてくるように、ということをお願いして、ちょっとした飲食をします。ということは何を意味するかといいますと、このお嫁さんのお腹の中にいる胎児は間引いたりしませんよ。この子どもはみんな育てるんですよ。ということ家族、親族や近隣の人びとに公示するという意義、あるいは家族、親族、近隣組織などの仲間に入れますよ。ということの意味する儀礼なのです。

十月十日とつきとうかが経ちますと、いよいよ出産となります。子どもが生まれますとウブメシ(産飯)を炊いて茶碗に盛り、産まれた子どもの枕元や神棚へ供えてウブノカミ(産神)を祭りますが、茶碗飯を粗雑に盛ると無器量になるといい、女の子の場合には愛嬌よしになるように笑窪になぞらえて二つの指あとをつけたりしていました。

子どもが生まれますと名前をつけますが、名前をつける時期は地域や家によって大体決まっておりました。最も早いのは生後3日目ですが、一般的には生後7日目に命名することが多かったけれども、生後11日目という所もありました。

ところで、日本人は名前というものに異常な感覚を持っておりましたので、命名ということはまことに重要な行為でした。先程も申しましたように早い場合は3日目に命名するわけですが、それまで名前をつけずに名なしの状態であらうと放っておきますと、不吉なことがおこるかも分かりません。昔の人の考え方では、世の中には非業の死をとげた者や餓死した人の靈魂などがうようよしており、名前のない肉魂だけの子どもを放置すると、浮遊している靈魂が入り込んで別の人間になることを恐れ、出産直後に仮の名をつけたのでした、たとえば吾川郡伊野町神谷では子どもが生まれたら、すぐに男の子でも女の子でもトリアゲバアサンが、「この子はクソベ-子じゃあ」といって仮の名前をつけておりました。クソベ-のクソというのは糞のことできない排泄物という意味なのですが、今のわたしたちの感覚から申しますと折角生まれた息子さんや娘さんに何故そんな不潔な糞などという名前をつけるのかといいますと、浮遊する靈魂から子どもを守るための処置だったのです。

話が少しよそ道へそれましたが、いずれにしても生後3日目なり7日目、11日目には正式に名前をつけます。この名付け祝いを土佐ではナキキ、ナビラキ、ナヒロメなどと呼んでおりました。ヒラキというのは披露という意味ですが、このナビラキ(名披露)には親族、知人、近隣の者などを招き、招かれた者は米、酒などを持参して共食します。名づけ

祝いは産まれた子どもが家族、親族の一員に、あるいは地域社会の一員になったことも公示し、同時に子どもがすくすくと元気に育つように、という意味を持った儀礼でありました。

生後 11 日目前後にはデゾメ(出初め)という儀礼がありました。これは子どもが母親や姑さんに連れられて近所や母親の実家、あるいは親族などを訪ねて挨拶するものでした。!! 日目にするとことが多かったようですが、後でお話します宮参りと一緒に行く所もありました。安芸郡北川村では火合わせ後の適当な日にデゾメモチを配って廻りますが、訪問を受けた家ではカツオ節やジャコを赤ちゃんになめさせ、これで赤ちゃんの頭をコツコツと叩いておりました。同村安倉では子どもの頬や唇などへ紅を少しつけてやるのが作法でした。香美郡香我美町正延では 11 日目に額に紅をつけた赤ちゃんを姑さんが連れて集落を回っておりまして、吾川郡吾川村中岩戸では訪問先の者が男の子には鍋墨をつけ、女の子には俵を踏ませていたということです。また幡多郡大月町古満目では!2 日目が出初めであり、母親が子どもを連れて実家や親族の家へ赤飯や餅を配っていたといいますが、先方では紙で艇斗を折ってお金を入れ、男の子には左耳、女の子には右耳に掛けてくれたということです。このような出初めの習俗を紹介しておりますときりがありませんが、この行事は子どもの親族や地域社会への仲間入りと祝福を意味する儀礼であります。

生後 33 日目には宮参りがあります。姑さんが孫をだっこして、あるいは母親が連れて行くこともあります。自分の村の氏神さまに、「こんな子どもが生まれましたので、氏子として承認してください、よろしく願います」ということを最初にお願ひに行くのがお宮参りという儀礼の意味なのです。氏神さまにはじめて挨拶に行くのですから、どうしても神さまに泣き声を聞いてもらわねばならないといって、子どもの足をつねったり、ひどいときには叩いたりして泣かせるのです。そうすると、「ああ、あそこの家にはええ跡とり息子が生まれたよ」といって神さまが認知して下さる。というわけなのです。これも入問社会への仲間入りをしていくための一つの儀礼であったのです。

ついで生後百日目にはハシゾロエ(箸揃え)とかモモカ(百日)の祝いという儀礼があります。赤ちゃんの母親の実家、つまり母方のおじいさんの家からお茶碗と箸を買って持ってきてましてオブノカミ(産神)をまつり、赤ちゃんに一口ご飯を食べさせる真似ごとをしてから家族一同で共食をいたします。これも赤ちゃんの無事な成長を祈念するとともに、その席に参加した人びとが、われわれのグループの一員として守ってあげますよ、と一言を誓い合う儀礼でもあったのです。

ついで氏子入りという儀礼があります。先ほど宮まいりについてはお話しましたが、これとは別に生後はじめての氏神さまの夏まつりや秋まつりのときには(それまでに 33 日間経過していないといけません)、氏子入りをを行います。母親や姑さんが赤ちゃんを連れ、お餅、酒、米などを持参し神官さんを介して氏子入りのお願ひをいたします。地域によってはお神楽を奉納してもらったり、そのほかいろいろなことが行なわれることもあります。これもそれぞれの地域の氏神さまの氏子として保護してください。ということですし、神さまの方からは認知してやるからちゃんとやっていけよ。ということの意味する儀礼であり、これも地域社会で生活していくための重要な一つの儀礼であったのです。

氏子入りについて、満 1 年目になりますと誕生祝い、初誕生祝いが行われますが、ここでちょっとふれておきたいのは、最近では小学生でも高校生でも、また大人でも盛んに誕生祝いとかプレゼントとかをしてありますが、これはここ 2、30 年来のことでありまして、

日本ではそういう誕生祝いの風習はありませんでした。生後1年目の初誕生祝いは行いましたが、2歳のときも3歳のときも行うようになったのは欧米から入ってきた新しい習俗であります。日本人は古くから初誕生は祝いましたが、また年齢計算も満で計算せず、

かぞえ年でやっておりました。しかし、明治以降民法とか刑法というような法律 - これはヨーロッパの法制を取り入れたものですが一では満年齢を取り入れたけれども、もともとはかぞえ年で年齢の勘定をしておりました。それはともかく1年目の誕生日には、また母方のおじいさん、おばあさん、隣近所、親族などが米や酒を持ち寄って子どもの成長を祈り、みんなが結束を固めるための飲食をおこないますが、儀礼の中心は誕生餅と将来の占いでした。

誕生餅を搗いて子どもに背負わせることは、高知県下全域で見られました。例えば安芸郡北川村竹屋敷では箕に入れた餅と米を背負わせ、前方からはやしたてながらはわせたり歩かせたりしていました。長岡郡本山町吉延では大餅と金を一緒に風呂敷に包んで背負わせ、土佐郡土佐山村高川では一生ネパイ(ねばり強い)ようにとって一升餅を背負わせて敷居を越えさせておりました。誕生餅を背負って歩くと元気に育ったとって喜びますが、逆にこれを忌む所もありました。たとえば安芸市八の谷では餅を背負って歩いた子どもは、父方の叔父が突きころばすものだといわれていました。同市赤野では「歩く子供は突きすえる」ものだといっていました。また吾川郡吾北村馬路、池川町坂本、吾川村上名野川、高岡郡梶原町本谷などでは父親が箒で突き飛ばしていたといえます。

子どもがすくすくと丈夫に育ち、元気に歩くのは嬉しいことですが、何故わざわざ突き飛ばさなければいけなかったのでしょうか。これは昔の人びとの考えでは、あまりにも急激に成長するのを忌み、わが子が普通の平凡な人間になるのを望んでいたためだといわれております。以前の社会では家や個人の願いをあからさまにだすのを嫌い、「並はずれた出来人」はムラの平和を乱すものとして恐れられたからでした。

子どもの前に扇子、筆、金、そろばん、はさみなどを並べて取らせ、それによって子どもの将来を占うことも広くみられました。たとえば安芸市古井では「金をとると欲な人間になる」「扇子をとると出世する」「はさみを取ると裁縫上手になる」「筆をとると勉強好きになる」などといっておりました。

女の子は3月、男の子は5月に初節句を祝う習慣が県下全域に見られました。親族や近隣、母親の実家などが幟、フラフ、人形、着物などを贈りますが、当日は贈り主を招いて柴餅や菱餅をオブノカミに供えてお祭りして祝宴を開き、お客や近隣の家々には祝餅を配ります。たとえば安芸市では女の子のときは赤、青、白の三重ねの菱餅、男の子の場合はノボリモチという四角な餅1個と丸餅2個を配っておりましたが、初生児を盛んに祝い2番目からは簡単にすることが多うございました。

ここで、ちょっと今までお話したことをおさらいしてみますと、まづ帯祝いのときにいろいろな人たちの協力を得ました。ついでお産見舞いや名付け祝い、出始め、宮まいり、箸揃え、氏子入り、初誕生などのときにも親族や地域社会の人びとの祝福と協力を得て共食をし、生まれた子どもがすくすくと元気に育つように祈ります。かつての日本の子育ては、このような儀礼のくり返しでありましたが、後で結論のところでお話しようと思いませんけれども、この点が今日の子育てと違うところです。

ところで、医療技術の進歩した今日の社会と違い以前の社会では乳幼児の死亡率が高く、生まれた子どもが元気に育つかどうか親の最も心配なことでした、そこで災難からのが

れるためのいろいろな呪法がありましたが、ここでは捨て子の風習についてお話してみたいと思います。

これは病弱な子どもや父母の厄年に生まれた子どもを道の四辻などへ捨てまして拾い親に拾ってもらうものですが、もちろんこれは形式的に捨てるだけで育てるのは実親であります。捨て子は拾い親に名前をつけてもらいまして、以後はこの名前を呼び本名は戸籍簿の上だけになり、小学校へ入学するまで本人も自分の本名が分からなかったというような例もあります。幡多地方には「生みの親より命親」という俚諺がありましたが、捨て子は拾い親が生存中は正月、盆、節句などにはあいさつにあがり、葬式のときにも子どもとしてのつとめを果たすのが普通でした。

室戸市佐喜浜町中尾では辻売りとか捨て子とかいいまして四辻へ子どもを捨て、そこを最初に通りがかった者に拾い親になってもらっておりましたが、拾い親はあらかじめ依頼してあることも、偶然そこを通りがかった者に頼むこともありました。安芸郡北川村竹屋敷でも四辻に捨て、最初に通りがかった者あるいは子ども運のよい者に拾い親を依頼しておりました。同じ北川村の安倉では拾い親のことを命乞いの親と呼んでおりましたが、これはその本質をついた呼び方です。香美郡香北町橋川野や太郎丸では子どもが大病を患うと、四辻へ出して子どもの名前を地面に書いて水をかけて人が通るのを待ちます。そうして最初に通りがかった人に拾い親を依頼し、辻または道のつく名前に改名しておりました。長岡郡大豊町粟生や八川では子どもが重病になったり、大怪我をしたりしますと、その子どもの着物を持って四辻に立ち3人目または5人目に通りがかった者に拾い親を頼み辻、道のつく名前に改名しておりました。高岡郡窪川町興津では子どもの着物と酒、ナマグサ(魚)を持参して四辻で待ち、3人目に通りがかった者に拾ってもらっておりましたが、ここでは拾い親をオヤゲノオヤ(親請けの親)、改名した名をオヤゲノオヤノナ(親請けの親の名)と呼んでいました。幡多郡大月町小才角や安満地では夜間に四辻へむしろを敷いて待ち、3人目または5人目の者と酒をくみ交わして拾い親を依頼しておりました。

子ども運のよい者に親取りしてもらう習慣も広くみられましたが、この習慣を一般に契約親・契約子と叫んでおりました。たとえば香我美町末延、中西川では病弱な子どもは里子に出す」といって子ども運のよい者に契約親を頼んでいました。宗教人を契約親にすることも多く、たとえば北川村柏木・土佐山村高川、吾川村森山などでは神官、僧侶、禱師などを契約親にしておりました。仁淀村大植、吾川村上名野川、東津野村口目ヶ市などでは祈禱師の指示する方角、年齢の人に契約親を頼んで酒をくみ交わしていましたが、契約親は新しい名前をつけ、着物一枚ぐらいを買い与えるのが普通でした。神仏に親取りしてもらう習慣も広くみられました。たとえば高知平野の村々では高知市中新町の多賀神社の契約子にすることが多かったが、これを香我美郡南部では「多賀さまの投げ子にする」といっていました。

今までお話しましたような捨て子と拾い親・契約子と契約親のような実の親子でない者が親子関係を結ぶことを擬制的親子関係と呼びますが、これは実の親以外の人びとの力をかりて子どもが無事に成育することを願う呪術的行為だったのです。

ところで、育児、子育てのことをコヤライといいますが、「コヤライは糞を三升舐めんと子にならん」といわれていたように、かつての子育てはまことに大変なこととでした。あまり子どもを大事にし過ぎて甘やかすと立派に成長せぬといい、「産児と搦きだちの餅にゃあ荒うかかれ」とか、「かわいい子は荒菰に巻け」「十五過ぎての子供の意見、彼岸

過ぎての麦の肥」などといわれていました。

このような俚諺からも分かりますように、かつての子育てにおいては親は子どもを厳しくしつけておりました。親のいうことを聞かないときには灸をすえたり、暗い土蔵に入れてとじ込めたり、柱へ縛りつけいくら泣きわめいても放置しておくというようなことを平気でおこなっておりました。昭和一ケタ生まれぐらいまでの者でしたら、たいていの者がこのような経験をお持ちだろうと思います。わたしにも経験がございますけれども、親に怒られ灸をすえられそうになったり、あるいは暗い倉の中にとじこめられて泣きわめいておりますと、いつの間にか隣の本家の叔母があらわれ「もうこの子は悪いことはせんから、どうぞこのおばあに免じて許しちゃってくれえや」というようなことを言いわたしのかわりに謝ってくれて、やっと許された経験が何回かございます。最近民俗学者として有名な千葉徳重教授の「間引きと水子」という本を読んでおりましたら、同じようなことが書かれておりましたので、かつてはどこでも同じような状態であったのだろうと思います。とにかく以前の社会では近隣や地域社会に連帯感があり、子どもは特定の家の子どもであると同時に、ムラの子ども、みんなの子どもでもあったわけですから子育て、子どもの教育についても地域社会の協力と協調が行われていたのです。悪いことをする子どもがいれば、自分の子どもであろうと他所の子どもであろうと遠慮することなく注意もするし、叱りつけてもいたのです。

ところが最近の子育ての状態はどうでしょうか。最近わたしもよく経験することですが - そして皆さん方の学校でも同じだろうと思いますが - 今の高校生は子どものときから全く怒られたことのない者がたくさんおまして、本当にわがままで自分本位の行動をする生徒が多くなっております。

最近はお子どもの数も1人か2人になりましたし、「かけがえのない大事な子ども」だといって子どもの言いなりになり、甘やかしている家庭も多いのではないのでしょうか。また、うっかり他所の子どもに注意したりしますと、「わたしたちは、わたしたちの流儀で子育てをしている。」といって、逆にねじこまれたというような話も聞いております。地域社会の連帯感がなくなりましたので、いろいろな問題が生じてまいりましたが、そのことについてはまた別の機会にお話してみたいと思います。

ところで、現在の学校教育では知育、ことばを変えて申しますと成績だけ、偏差値だけを問題にすることが多くなりました。父兄懇談会などでも、お母さん方は成績だけ、わが子の成績順位だけを問題にし、その他のことについてはあまり関心を示さない者が多くなっております。もちろん、そうでないご父兄も沢山おりますけれども、いま申しあげましたような状況が多くなっているのは事実であると思います。

また、わたしたち教師も生徒を成績中心にみる傾向が強くなってまいりましたが、これも古くからあったことではありますけれども、最近これがひどくなっているように思われます。これについては、わたしたち教師もお互いに反省しなければならないことだろうと思います。

まだ、いろいろとお話したいことがあります。与えられました時間がまいりましたので、これで終わらせていただきます。